

- 2089 岡野史佳「アリス迷宮」(『Short Stories』'88 SPRING, 1988年4月, 別冊ララ臨時増刊, p.107-114)
どこまでも続く螺旋階段を昇り続けるアリスの物語。階段の下には不思議の国があり, 今日もお茶会が開かれているらしい。途中で出会う人物は皆, 下の世界へ向かうばかり。彼女だけがただ一人, 未知の世界を夢見ながらいつまでも階段を昇り続ける。

- 2090 高河ゆん『ありす IN WONDERLAND』1 (光文社, 1989年, VAL Kobunsha Comics)
たんすの扉のあちら側の夢の島(ワンダーランド) 207代目夢城当主ルイス・キャロルとたんすの扉のこちら側の日本の女子高生仙道ありすの恋物語。

「あたしがありすで——あなたがルイス・キャロルなら、ぴったりね」

p. 45

- 2091 小林誠「小林誠の不思議の国のアリス」(『月刊ニュータイプ』4巻4号, 1988年4月, 別冊付録「NEWTTYPE コミック GENKi」p.124-129)

「アナタモヤミツキフシギナ温泉の素13夜分」の効能で不思議の国のお茶会に参加するアリスの物語。

- 2092 佐藤史生「楯円軌道ラブソディ」(『プチフラワー』8巻9号通巻63号, 1987年9月, p.333-375)

近未来の旧都心新宿。とあるホロビジョンシアターのブース42。スクリーン上の幻影の東京を少女アリスが駆け抜ける。

まったく期待はしてなかったのにそれは見事なフィルムで、40分足らずのめくるめく迷宮、「不思議の国のアリス」の東京版といったところ。
主演の少女は、ガキっばいではなく、モロに子供なのだった。
奇怪に年老いた美しい少女…、旧世界風に洗練された少女アリス。

p. 339

- 2093 高橋葉介「亜里子の館」(高橋葉介『夢幻紳士<マンガ少年版>』(朝日ソノラマ, 1985年, デュオ・セレクション10) p.127-150)

永遠にある一定の年齢のまま生きるということは、すなわち、細胞レベルでの不老不死が達成されている結果である、と考えることができる。もしもそれが実現されるならば、たとえば少女は永遠に少女のまま生きることができののだろうか。しかしそもそも、あらゆる変化を拒否しながら生き続けるということはそれ自体、自己矛盾以外の何物でもないのではないだろうか。この作品の中で、人為的に停滞させた一瞬を生きる少女亜里子は、現実と呼ばれる悪夢を永遠に夢見続ける。彼女を変化から保護するために機能している家は、同時に、彼女を閉じ込める機能をも果たさざるを得ない。この家の外部に彼女の生は存在しないからである。しかし、その内部にあるはずの生とはいったい何なのだろうか。すでに、目覚めを導く出口はどこにも存在しない。

「これで、たくさん、もう大きくなれないといいわ。今でも戸口から出られないわ。こんなに飲まなけりゃよかったものを！」

(『不思議の国のアリス』ルイス=キャロル・岩崎民平訳 角川文庫より)

p. 128